

共に生きて

紙面についてのご意見、感想をお寄せください。メール、ファクスで受け付けます。郵送の場合は〒810-8721(住所不要)、西日本新聞生活特報部へ。

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-



登山 万佐子

「手当て」に祈り込めて

体重千々未満で生まれた「超低出生体重児」。まず生まれて3日、そして1週間がヤマといわれています。長女綾美(8)もそうでした。生後3日目に脳出血と肺出血を同時に起こし、かなり危険な状態に陥りました。私(44)の病室を出たばかりの夫も病院へとんぼ返り。室温管理され、暖かいはずの夜の新生児集中治療室(NICU)がひんやりと感じられました。蘇生に懸命な医師と、赤く点滅したままの心拍モニターのランプ…。8年たっても鮮明な映像でよみがえってきます。

それでも、しばらくはわずかに幸い娘は持ち直しました。それでも、しばらくはわずかに

保育器の中で、父親の手のひらに包まれる綾美ちゃん



な振動も影響するため、血がこびりついたままのガーゼを取り換えることもできなかつた。私が初めて娘に触れたのは生後15日目。うれしいより触れても大丈夫なのか、と怖かったのが正直な気持ちです。「手のひら全体で包み込むように触ってあげてください」と看護師さんに言われたものの、チューブやコードだらけの小さな体のどこにどう触れていいのかわからず戸惑うばかり。指先でチョンと触るのが精いっぱいでした。試験はその後も次々と襲い

ました。自然に閉じるはずの心臓の動脈管が閉じない。脳内に過剰に髄液がたまる水頭症の恐れがある。追加される薬。心の整理が追いつかず、医師の説明もむなしいくらい頭に入りません。今日は何と言われるのだろうかと、NICUのドアの前で深呼吸しなければ中に入れません。まさに薄水を踏むような毎日。当時、面会は1日30分で、保育器の傍らでわが子に「触る」ことしかできない私。親として世話もできないもどかしさが募ります。そんなある日、体重600gの赤ちゃんが保育器の中で手に包まれている新聞写真が目飛び込んできました。保育器の赤ちゃんを両手で包み込む「ホールディング」についての記事でした。親が赤ちゃんに語りかけながら肌をなでたり、マッサージしたりする「タッチケア」は、NICUで

それからは毎日毎日、手のひらですっぽりと娘の体を包み込み「元氣な細胞に入れ替われ」と祈るように語りかけました。娘は気持ちよさそうにずっと眠っています。面会時間が終わり、手を離すとすぐ目覚める娘。そんな反応もうれしく、親にしかできない「手当て」に私の気持ちもようやく落ち着いてきました。「NICU子クラブ カンガルーの親子」代表、福岡県筑紫(野市)

保育器に入ってくる医師や看護師の手は採血や処置など赤ちゃんにとって嫌なことをされる手。でも、親の手は決して嫌なことはいらない。親の手はいろいろなストレスから守るのです。